

はじめに

集英社が一九八六年に刊行を始めた「情報・知識 imidas」は、政治経済、社会、文化など多彩な分野をそれぞれの第一人者が執筆することで、学生から知識人まで幅広い層からの支持を集めた年次版の現代用語事典である。二〇〇七年版を最後に紙媒体からインターネットに場所を移し、現在は「情報・知識&オピニオン imidas」の名で、事典の機能を維持しつつ、時事問題を取り扱うオピニオンや、コラム、エッセイを掲載するウェブサイトとして運営している。

本書『イミダス 現代の視点2021』を編むにあたり、二〇一八年五月から二〇二〇年八月にわたって掲載された記事の中から二四本を厳選し、テーマに沿って四章に振り分けた。

「こんな年になるとは思わなかった」——「I コロナの時代」では、誰ひとり予想だになかった新型コロナウイルスのパンデミックが、私たちの暮らしや心性にどのような影響を与えたのかを考察する。

「II 変わる法律・制度」の記事は、わずか一〜二年の間に、国民のはるか頭上を通り過ぎていった法案ひとつひとつに正面から向き合っている。これらの法案はすべて、未来に直結する

ものだ。問い直せば、日本の姿がそこに見えてくる。

「Ⅲ 内政・外交のいま」。安倍晋三政権に成果はあったのか。経済や外交を振り返るとともに、台風被害の激甚化やカジノ構想、福島原発の汚染水など、局所的に見えて実は広く深い問題を徹底的に掘り下げている。また世界と日本ととりわけ大きな影響力を持つ二大国、アメリカと中国について、注視に値する最新の動向を加えた。

「Ⅳ 揺れる社会」で扱ったテーマは、差別の露呈、全体主義の萌芽^{ほうが}、学術的な競争力の低下、歴史修正主義の横行。日本社会全体を覆いかけているこれらの問題を、そのまま放置するののか。それとも、向き合い克服するのか。私たちは岐路に立っている。放置をよしとしないのであれば、記事の中から克服に向けたヒントを得ることができるだろう。

各記事の冒頭には公開年月日を付し、原則として公開当時のままの形で収録している（公開後に法改正などの新たな動きが見られた場合には、付記を添えた）。

「あの日、何があったか」「その頃、何をしていたか」。思い返しながら、忘れられかけている数々の問題を掘り起こし、今後の日本を読み解くための助けとなることを願っている。